法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

移住者の韓国語 ： 韓国「多文化小説」における移住者の言語表象を中心に

KIRA, Kanae / 吉良, 佳奈江

(出版者 / Publisher)
法政大学言語・文化センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Journal for Research in Languages and Cultures / 言語と文化
(巻 / Volume)
20
(開始ページ / Start Page)
153
(終了ページ / End Page)
167
(発行年 / Year)
2023-01-27
(URL)
https://doi.org/10.15002/00026727

移住者の韓国語

――韓国「多文化小説」における移住者の言語表象を中心に――

吉良佳奈江

はじめに「多文化小説」とは何か

韓国では2000年代から2010年代前半にわたっていわゆる「多文化小説」と呼ばれる小説群が多数発表された[(1)]。これらは弱者として韓国社会に編入されることになった移住外国人と韓国社会との関係を主題とし，移住外国人に対する韓国社会の差別や偏見を時に露悪的に描くことで，謝罪意識を描くものが多い。韓国では自国に滞在する外国人が増加した状況を「多文化社会（multicultural society）」，父母のどちらかが（多くの場合は母親だが）韓国人ではない家族構成の家庭を「多文化家族（multicultural family）」と呼んでいる。しかし，このような文脈で「多文化」という言葉が使われる場合，様々な文化を尊重するという意味ではない[(2)]。そのため，本稿でも「　」をつけたまま「多文化社会」と表記する。

「多文化小説」の登場人物は移住者が韓国に流入する経緯によって，移住労働者，結婚移住女性，北朝鮮離脱民に大きく分類することができる。その中でも顕著なエスニックグループとして中国朝鮮族とベトナム人があげられる。前者は移住労働者，結婚移住女性のどちらも小説に登場しているのに比べ，後者は男女ともに多くの移住労働者が流入しているにも関わらず，ベトナム人男性や女性労働者が小説に登場することはほとんどなく，結婚移住女性として表象されることが際立って多い。実際にベトナムからの結婚移住は，結婚相手のいない地方の中年男性が業者を介して高額な費用を払って若い女性と結婚するケースが多く，社会問題ともなった。そのことを反映して「多文化小説」の内容としては，ベトナム人女性を商品のように扱うことに対する批判[(3)]，金で買ってきたような不釣り合いな関係や性的搾取[(4)]，抑圧された結婚生活の中での女性の自立など[(5)]，全般的にベトナム人女性を被害者として，韓国人男性及

び韓国社会を加害者として描くことで，韓国社会が持つ差別意識を描き出そうとするものが多い。

「多文化小説」においては，言語も大きなテーマのひとつである。韓国では多文化政策によって移住外国人のためのさまざまな韓国語教育の機会が用意されているが，それだけで韓国語ができるようになるわけではない。「多文化小説」の中で移住者たちが書き，話す韓国語は拙く，不十分なものとして再現される[(6)]。しかし，彼らは韓国語が不十分だという理由で批判されることはない。韓国人および韓国の社会は，移住者の不十分な韓国語を許容している。移住者の韓国語が不十分なのは当然のことなのだが，そのことを母語話者である韓国人が評価することになり，一方的な優越感を持つことにもなる。これは，自らを教え導くもの，相手を弱く幼いものと規定する家父長主義的であり，特に父親的温情主義的な態度に陥りやすい状況であり，移住者が指導されるべき弱者であるという階級的差異を固定する要因ともなる。また，韓国人側が移住者の国の言葉を学んでまでコミュニケーションをとろうとするのは非常にまれである[(7)]。その結果，移住者は韓国人・韓国社会とのコミュニケーションに困難を抱えることになる。

本論文では，チョン・インの短編「他人との時間」(2009)[(8)]を分析対象として，結婚移住ベトナム人女性と言語という二つの観点から，移住者の韓国語がどのように描かれ，どのような意味を持つものなのか，その様相を確認したいと思う。

1. ベトナム人女性との結婚に対する偏見

「他人との時間」は，韓国人男性の一人称の視点から自分と結婚して韓国に移住してきたベトナム人女性の葛藤を描く作品である。しかし，この「他人との時間」は前述したような業者を通じた国際結婚ではなく，「僕」のひとめぼれから始まった恋愛による結婚であり，夫婦の結婚生活は対等な関係から始まっている。

物語は，ペットの犬が死に，葬儀社を手配して火葬するまでの現在の時間と，妻と出会い結婚し彼女が帰国してしまうまでの回想が交互に描かれる。ベトナム女性に対する差別感など自分にはないと信じている「僕」は，子どもを連れて帰国した妻から電話で別れを告げられ，戸惑って理由を尋ねる。「考え

てみれば……あなたにもわかるでしょう」と言われはじめて，二人の出会いから別れまでの過程をたどりながら，またペットの火葬場に向かう人々の会話もきっかけとなって，妻が別れを決意するに至った理由に「僕」は思い至る。そしてその理由に全く気付いていなかったわけではなく，うすうす気づいていたのに無視していたことを自覚する。物語の最後の場面では火葬場にいる「僕」とベトナムにいる妻が電話で話し，妻の本心を聞くことで，答え合わせをするような構成となっている。

韓国社会一般がベトナム人女性に対して持っている差別や偏見は，前述のように多くの作品で描写されてきた。この作品でも「僕」が彼女と結婚すると言ったときには，家族から次のように差別的な言葉で反対される。

> たしかに結婚は遅くなったが，だからと言って違う民族，特に肌が黒い東南アジアの血が混ざるなどあってはならないことだというのだ。そんな結婚など結婚相手を探せない田舎の人間がすることで，大学で講義までしている人間がどうしてベトナム女性を結婚相手に選ぶのか
> （原書単行本 p.83 ページ，以下ページ数のみ記す。日本語はすべて筆者による試訳）

結婚後も外国人妻に関するテレビ番組を見ながら「あの人たちはみんな貧しい家に生まれて売られてきたのだと，根拠のない話を妻の前で言ってはばからな」い母親に対して「僕」は「妻はベトナムではかなり教養のある中産階級の家の娘だ」と反論している。「妻と母の関係はいつまでもぎくしゃくして」おり，ひとたび家から外に出てもベトナム人移住女性に対する差別的な表現が存在している。

> 家でも外でも人からじろじろ見られて，それまでの彼女が持っていた自尊感情を損なうことがずいぶんあった。……郊外に出かけてベトナム女性との結婚を勧める言葉に（横断幕には野蛮にも〈ベトナム女性は逃げません〉と書いてあった）を見て，家に帰ろうと言い出してそのまま帰宅した[9]（p.90）

このようなエピソードはベトナム人結婚移住女性を描くほかの作品でも繰り

返し描かれている。話者である「僕」は自分の親を含めて韓国社会にベトナム人結婚移住女性に対する差別意識があることを十分理解したうえで，自分はベトナム人に対する差別意識を持たない人間だと信じている。

「僕」は，里帰りした妻から韓国に帰らないと告げられてもなお，「国際結婚がみな直面する悩みだったら今さら言い立てることもないんじゃないか」と考え，妻の葛藤の原因となった自分の中の差別意識に気づいていない。

2. 言語

作品内で二人はベトナム語ないし韓国語，あるいはベトナム語と韓国語を混ぜて使用している。全編を通して英語を使う描写はなく，「僕」の不十分なベトナム語と妻の不十分な韓国語を用いて小説内で交わされる複雑な内容を十分に理解できたとは思えないが，その点は不問とし，ふたりの出会いから別れまでと，その時にどのような言語を使っていたかを確認してみたい。

「僕」は旅行先のベトナムで妻に出会いひとめぼれをした。「へたくそな」言葉で話しかけ，その後「徹夜でベトナム語を身に着けた」。「僕」のベトナム語について具体的な記述はなく，帰国後ベトナム語学習が継続されたかはわからないが，結婚後も妻のベトナム語交じりの言葉を理解する場面や，妻が帰国してしまってから彼女の妹や友人に電話する場面があるので，ある程度のベトナム語はできると考えられる。

「僕」の帰国後，結婚前の妻から届いた手紙はどの言葉を使っているのか記述はない。

結婚して韓国での生活を始めた妻がどのようにして韓国語を学んだのかについて具体的な記述はない。母親から「外国から連れてきてこれから一緒に暮らす女に言葉一つ教えていない」状態で妻を迎え入れたと非難されており，韓国に移住した時点では韓国語はできなかったこと，そして，「妻は移住初期とは違って韓国語（ウリマル）[10]を覚えようという努力をほとんどしておらず」とあるので，移住初期に韓国語を覚える努力をしていたことがわかる。韓国では結婚移住者の韓国語習得のための様々な支援があるので，公的な支援を受けて学んだと考えるのが自然だ。

結婚生活に関しては韓国人男性とベトナム人女性の家庭で，二人がそれぞれ母語と外国語を混ぜながら二か国語で会話をしていたのだろう。

その後，犬を飼いハノと名づけると妻は「犬を抱っこしてはハノ，ハノと呼びながらあらゆる言葉を母国語で話し続け」るようになり，「そのうち妻が話し続ける言葉の中に，僕にはわからない言葉が増えてい」く。犬の看病をめぐって対立したときには「韓国語（ウリマル）と母国語を混ぜながら，僕に反論して」いる

「妻のおしゃべりが，少し落ち着いたのは初めての子どもができてからだった。（……）ハノ向けて打ち明けていた多くの話を，妻は口寄せでもするかのように少しずつ子どもに聞かせるようになった」そのころ「二か国の言葉を混ぜて話すことが増えた。特に子どもの世話をするときにそうなった」。「僕はなんだか焦ってしまって，何度も子どもに話しかけ」るようになるが，これは韓国語だろう。

「僕」の使用言語は妻と出会ってからベトナム語を覚えて使い始め，結婚生活の間はベトナム語と韓国語を混ぜて使っていたが，子どもが言葉を覚えるようになってからは，子どもに向かって意識的に韓国語を使うようになった。家庭の外では当然韓国語を話している。つまり，ベトナム語は妻のためだけに学び，妻に対して使う外国語である。ベトナムに半分ルーツを持つ自分の子どもに対してベトナム語を使うことはない。

一方，妻の言語使用は母国にいるときにはベトナム語，結婚して韓国に住み始めてから韓国語の学習を始める。韓国語の学習を続けながらも「僕のもとに嫁いできた妻は，ずっとコミュニケーションの難しさを抱えていた」が，すでに述べた横断幕の一件ではハングルを読み，テレビの内容もある程度理解できていおり，「テレビで事実と異なる報道がされると，スルーすればいいようなことでも担当のプロデューサーに直接電話をかけてつたない韓国語でとつとつと抗議した」とあるので，つたないながら基本的な韓国語ができることになっている。

韓国での生活において妻は母国語であるベトナム語と外国語である韓国語を使いわけている。番組に抗議するためにプロデューサーに電話をするときは，つたないながらも韓国語を話し，「僕」との話では韓国語と母国語を交ぜながら話している。さらに，犬と話すとき，生まれたばかりの子どもと話すときには母国語であるベトナム語を，子どもが言葉を覚え始めると韓国語とベトナム語を混ぜて話そうとしている。

ここまでは「韓国語」，「ベトナム語」と表記したが，作品中ではこの二言語

は次の表で見るように様々なニュアンスを持つ言葉で表現されている。

表 「韓国語」「ベトナム語」を指す表現

発話者	韓国語	ベトナム語
「僕」	韓国語（ウリマル） （82，88，94，96，97） 韓国語（88） つたない韓国語（ウリマル） （90）	韓国語（ウリマル）ではない自分の母国語（81） 君の国の言葉（82，97） 自分の母国語（82，89，96） ベトナム語（82，89） 母国語（92） 僕以外には誰も聞き取れない言葉（92） それまで口にできなかった母国（92） 自分の国の言葉ではない他国の言葉（95） 異国の言語（96） 自分の国の言葉（101） まるきり異国の言葉（103）
妻	うまくもない，あなたの国の言葉（97） あなたの国の言葉（104）	私の母国語（104）
母	韓国語（ウリマル）（94） 父親の国の言葉（96）	自分の母親の国の言葉（96） 誰も聞き取れない言葉（94） くだらない言葉（94） あんな言葉（95）

（　）内は原文のページ数

韓国人は韓国語を表すときに「私たちの言葉」を意味する「우리 말（ウリマル）」という単語を使うことが多いが，この作品の中でも「한국어（韓国語）」が使われているのは「ハノイのとある大学で韓国語を教えている友人」（하노이의 한 대학에서 한국어를 가르치는 친구 単行本本文 p.88。以下ページ数は単行本より）という部分のみで，最も多く使われている表現は「ウリマル」である。一般的な「韓国語（ウリマル）」（우리 말，p. 82, 88, 94, 96, 97）だけでなく，妻の言葉を指して「つたない韓国語（ウリマル）」（서툰 우리말，p. 90），妻は自分について「うまくもない，あなたの国の言葉」（잘 되지도 않는 당신네 나라 말，p. 97）「あなたの国の言葉」（당신네 나라 말，p. 104）という単語を使っている。

一方のベトナム語を指す表現としては「ベトナム語」（베트남어，p. 82, 89, 96）という記述もあるが，こちらもやはり別の呼び方をしていることが多い。「僕」が妻の言葉を指して「韓国語（ウリマル）ではない自分の母国語」（우리

말 아닌 자신의 머국어，p. 81)「君の国の言葉」(단싱 나라 말，p. 82, 97)，「自分の母国語」(자신의 모국어，p. 88)，「母国語」(모국어，p. 92)「僕以外には誰も聞き取れない言葉」(나 외에는 아무도 알아듣지 못하는 말，p. 92)，「それまで口にできなかった母国語」(그 동안 하지 못했던 모국어，p. 92)，「自分の国の言葉」(자신의 나라 말，101)，妻と子どもが交わす話は「異国の言語」(이국의 언어，96)，子どもが話すベトナム語は「自分の国の言葉ではない他国の言葉」(우리 나라 말 아닌 타국의 말，p. 95)，「まるきり異国の言語」(온통 이국의 언어，p. 103) と呼んでいる。「僕」の母親は孫の視点から対照的に韓国語を「父親の国の言葉」(에비 나라 말，p. 96)，ベトナム語を「自分の母親の国の言葉」(지 에미 나라 말，p. 96) とも呼んでいる場面もあるが，息子の妻が話す言葉について「誰も聞き取れない言葉」(아무도 알아듣지 못하는 말，p. 94)，「くだらない言葉」(시답잖은 말，p. 94)，「あんなことば」(그 따위 말，p. 95)「よその国の言葉」(남의 나라 말，p. 95) と表現している。「僕」は子どもが発したベトナム語に対しては「自分の国の言葉ではない外国の言葉」(내 나라 말이 아닌 타국의 말，p. 95)，「外国の言語」(외국의 언어，p. 96) とまで言っている。

ベトナム語と韓国語という二つの言語を様々な表現で繰り返し語ることで，特に「僕」の母親がベトナム語を卑下している価値観が目立つが，一方で「僕」も最初は自ら進んで身に着けたベトナム語に対する評価が変わっていくことがわかる。

3. 子どもと言語

「僕」は妻のベトナム語をどう思っていたのだろうか。犬のハノを飼いはじめたころは「そのうち妻が話し続ける言葉の中に，僕にはわからない言葉が増えていった。だからなのか，妻が犬を抱いているとき僕たちの間には壁が一つ立ち上がっているようだった。その壁は次第に分厚くなり，時にはその壁の向こうに本当に妻がいるのだろうかとのぞき込みたくなるほどだった」と疎外感を感じている。しかし，「僕」が不快に感じているのは，「僕」にわからない言葉でコミュニケーションしている妻とハノの関係であり，ベトナム語そのものではない。「妻のおしゃべりに僕は次第に嫌気がさしていったが，妻はそれまでのどんな時よりも幸せそうだった」という描写からは，不快感だけではなく

妻を見守る視線も感じられる。これは子どもが生まれてからも同じで「乳を含ませながら，おむつを替えながら，子どもをおんぶしてリビングを歩きながら柔らかな声でつぶやき続ける妻は，愛らしかった」と，妻のベトナム語そのものを否定しているわけではないのだ。

妻のベトナム語に最初に不快感を示したのは，孫に会いに来ていた「僕」の母親である。

> 「あの子は一体何の話をあんなにぺちゃくちゃしゃべっているの？ ひとりでぶつぶつと，誰も聞き取れない言葉をあんなにたくさん話すものかね？ 子どもは母親の言葉を覚えるものだから，今から気を付けさせるんだよ。このままだとジョンユニが韓国語（ウリマル）もきちんとできないうちに，くだらない言葉を先に覚えちまうよ。英語だったらともかく，あんな言葉覚えたからって，どこで役に立つっていうのかね……」[11]。（p.94）

「僕」の母親にとって，ベトナム語は「くだらない言葉」「あんな言葉」である。さらに「英語だったらともかく」という言葉からは母親の中にはまず母語としての韓国語，そして外国語を身に着けるとしても英語は身に着けるべき教育でベトナム語はつまらない言語という序列意識があることもわかる。「僕」も「英語と比較してよその国の言葉を貶める母の言葉には，顔がかっと火照」り，「母さんも，まったく。今時，外国語だったらどんな言葉でも知っていればいるだけいい世の中ですよ。うちのジョンユニは最初からバイリンガルになるんですから，むしろうまくいったんですよ」[12]と，やんわりと反論している。ここでも「僕」は，世間と同じように妻，あるいは妻の国の言葉を差別的に見る母親に対して反論することで，自らは差別意識のない人間としてふるまっている。

そのころ，「妻は移住初期とは違って韓国語（ウリマル）を覚えようという努力をほとんどしておらず，二か国の言葉を混ぜて話すことが増えた。特に子どもの世話をするときにそうな」ることに気づいた「僕」は，「何度も子どもに話しかけ，妻の言動にも口を出し始めた」。

つまり，このころから「僕」にとっての言語選択の問題は妻が何語を話すかではなく，子どもが何語を覚えるかという点に焦点が移っている。そして「子どもがベトナム語と韓国語（ウリマル），どちらも覚えられるようにしなくて

はいけないね」と，妻に話している。
そして，実際に子どもが言葉を話し始めると事件が起きる。

> 仕事から帰った僕を迎えに，よちよちと近寄ってきた子どもが「チャー（パパ）」と言ってしがみついてきた。その瞬間，我知らず子どもを突き飛ばしてしまった。子どもが言葉を覚えたことはうれしく不思議だったが，自分の国の言葉ではない外国の言葉を口にしながら追いかけてくる子どもは何よりも遠く感じられた。（95）

この時の「僕」にとって，ベトナム語は妻の母国語ではなく「自分の言葉ではない外国の言葉」である。「僕」はこの件について妻に謝ることができずに部屋にこもり，後日この事件がいやしがたい亀裂を生んだと回想することになる。
「一度言葉を覚え始めた子どもは，すごい速さで言葉を覚えていった。一日一日言葉が増え，母親とやり取りする会話も随分長くなった」ここでの母子の会話はベトナム語である。

> 「その日も妻は子どもを膝に抱いてちょうど数字を教えているところだった。最初は韓国語（ウリマル）で始めたが，いつの間にかベトナム語に代わっていた（……）少しするとリビングから聞こえてくる外国の言語が太鼓の音のようにドーンドーンと響いて頭の中をひっかきまわしはじめた。すると，そのころから急に足の遠のいた母の言葉が思い浮かんだ。おまえもとんだまぬけだねえ。子どもが生まれりゃそれだけで父親になれると思ったのかね。おまえの子はもう，母親のもんだよ。父親の国の言葉よりも，母親の国の言葉のほうが上手なんだからねえ，まったく，という言葉が思い浮かんだ瞬間，急に不快感がこみあげて耐えられなかった。僕は飛び出して，声を上げた。いい加減にしてくれ！」（p.96）

「少しするとリビングから聞こえてくる外国の言語が太鼓の音のようにドーンドーンと響いて」という表現は，子どもがすごい速さでベトナム語を覚えることが彼にとって脅威となっていることを暗示する。子どもを奪われるという脅威である。もちろんそのように考えるのには，母親の言葉も影響しているだ

ろう。

「この国に来たんだから，この国の言葉から教えないと。今，言葉を覚える盛りの子どもを抱え込んで，君の国の言葉だけ教えてどうするつもりだよ」と問う「僕」に対して妻が「私，そんな難しいことわかりません。自分の子どもと話がしたいだけです」と答える会話には差別意識などなかったはずの「僕」の内心と妻の本音の対立でもある。「うまくもない，あなたの国の言葉をヘタクソに話しながら馬鹿みたいに母親の真似でもしろっていうの？」という妻の反論は実のところ「僕」の本心を言い当てたものだろう。どこまで意識していたかわからないが，「僕」が願っていたのは，妻が子どもの前でベトナム語ではなく韓国語を話すことだ。それは，妻にとって同化の強要であり，固有性を捨てろということでもある。

4. ハノ

ところでハノという犬は「僕」と妻にとってどんな存在だったのか。妻は初めてその犬に出会ったときにこう言っている。

> 犬の目ってどうしてこんなふうに見えるのかな？ すごくかわいそうに見える……。あなた，わかる？ わたしもこんなふうに見えるんじゃないかって，いつも気にしてるの。かわいそうな顔をしていたら，韓国の人が無視するから……。あなたはわからないでしょう？ 韓国人がどんなに無礼な人たちか。（p.91）

妻は韓国の社会で対等な人間として扱ってもらえない自分の存在を，犬に重ねている。韓国語では自分の考えを十分に伝えることができず，肌の色の違う移住者たちを動物になぞらえることはほかの「多文化小説」でも見られる[(13)]。ハノの名前は妻が「自分の生まれた土地の名前，ハノイからとったもの」で「この数年間，妻の話し相手になってくれて，（妻と子どもが家を出てからの：筆者注）この数週間は僕にとっても忠実に家族役を果たしてくれた」存在である。

ベトナム語で話しかけられると「妻の膝にだっこされたハノが，まるで言葉を聞き取っているように何度もうなずき，首をかしげてい」て，「その日その

日の妻の気分に合わせて，毎回違う話し相手になった」。そして「日を追うにつれてひどくなる妻のおしゃべりに僕は次第に嫌気がさしていったが，妻はそれまでのどんな時よりも幸せそうだった」。

火葬場へ向かう車の中で，捨て犬を引き取るボランティアを続けてきたというおばあさんは葬儀社の所長から褒められると「自分が寂しくないようにやっているだけなの。人間は寂しかったら生きていけないから。人間はどこにいても，言葉をきちんと聞いてもらえば生きがいがあるってものよ。聞いてくれる相手がいなかったら，地獄ですよ，地獄」と答えている。この言葉を聞いた「僕」は妻にとってハノがどんな存在だったのか，そして自分が彼女にどんな態度をとっていたのか理解する。「数えきれないほどハノに向かって語り掛けていた言葉が，異国の地での寂しさを克服する方法だと気づかなかったのか。違う。僕だってそれに気づかなかったわけではない。気づいていながらも，僕は彼女がこの土地にしっかりと根を下ろすまで待ってあげる心の広さがなかった」。

「僕」は妻のおしゃべりを「ハノが聞いてくれるといっても独り言と変わりのない」ものだと考えているが，対話が成立しなくとも，母国語で話すこと，そしてそれを聞いてくれる存在が妻にとって大切だったのだ。また，この聞くだけの存在ということにも意味がある。生まれたばかりの子どもと犬は言葉が通じず聞くだけという点が共通し，妻は両者とも自分の母語で話しかける。犬はベトナム語を覚えて話すことはないが，子どもはベトナム語を覚えてゆく。そのため「僕」は妻がハノに対してベトナム語で話すことは許容できるが，子どもに向かってベトナム語で話しかけ続ける妻，ベトナム語を覚えてしまう子どもを受け止めることができない。

妻がハノに向かって「僕」が理解できない単語まで使ってベトナム語で話すとき，「妻が犬を抱いているとき僕たちの間には壁が一つ立ち上がっているよう」に感じて「僕」は疎外感を感じていた。自分にわからない言葉でコミュニケーションがなされ，自分はその輪に入っていけない疎外感。これは，韓国社会で妻が感じていた感覚そのものではないか。子どもには韓国語が上手になってほしいと願いながら，妻の不十分な韓国語は許容する。それは妻をいつまでも韓国語が不十分なまま，韓国社会との意思疎通の手段を持たない，疎外された状態に置くことになる。

5. 下手な韓国語を許す心理

「僕」は妻のベトナム語を否定しながら，韓国語で話してほしいと願っている。しかし，妻の韓国語はそれほど上手ではない。では，妻の不十分な韓国語についてどう思っていたのだろうか。それは，家を出ていく妻の最後の言葉に感じた「僕」の言葉に端的に表れている。「僕には行ってきます（다녀올게요 / タニョオルケヨ），とは言わずに，じゃあね（갈게요 / カルケヨ），と言った。その時僕は何の疑いもなく，ふたつのあいさつの微妙な違いがまだわからない妻に，教えてあげなくちゃなと思っただけだった」

妻はこの時点で，別れを決心している。そして，「タニョオルケヨ」と「カルケヨ」の違いを十分理解して，その言葉を選んでいるのだ。「僕」は，妻が帰ってこないとは夢にも思わず，妻の韓国語が不十分だと思い込み，些細な間違いをおそらくは微笑ましく思い，親切にも「教えてあげなくちゃな」と父親的温情主義を発揮している。子どもの前で韓国語を話すことを望みながらも，妻の不十分な韓国語を許容する態度には，ベトナム人女性である妻が，自分より劣っているのは当然であるという気持ちが表れている。ベトナム人女性を差別する自分の母親に反論していた「僕」の中にも，ベトナム人女性に対する差別意識，優越感が存在したことを，著者のチョン・インはこの短い文章で描き出している。

終わりに　言葉の持つ様々な意味

本稿で分析対象とした「他人との時間」では，言語が様々な意味を持って登場している。まず，コミュニケーションの手段として。「僕」は徹夜で覚えたベトナム語で，妻の気持ちを手に入れた。結婚移住後の妻も，韓国語を努力して学び，自分の意見を述べることができるまでになっている。

また，言語には自らの固有性を担保するアイデンティティとしての側面がある。特に，この作品ではアイデンティティとしての母語が大きなテーマとなっている。ハノに話すベトナム語は相互的なコミュニケーションではないが，おばあさんの言葉を借りれば，言葉をきちんと聞いてもらえるのは生きがいである。コミュニケーションのためではなく，妻が自らの固有性を維持するための

言葉である。韓国語を話す社会で，疎外された自分の心を守るためでもあっただろう。

妻と子どもが話すベトナム語は，コミュニケーションの手段であると同時に固有性を担保する手段でもある。常に子どもと一緒にいる妻にとっては，まずコミュニケーションの手段であっただろう。一方，「僕」は子どもが獲得するだろう言語が子どものアイデンティティを決定するものだと判断したのではないか。さらには，ベトナム語は自分の子どものアイデンティティとしてはふさわしくないと思ったのではないか。そのことを恐れるあまり，妻が母語であるベトナム語を話すことさえ非難するようになった。その結果，「妻が選択したのは，結局自分の母国語で，僕との決別」だった。電話の向こうから聞こえてくる「声は僕の子どもなのに，しゃべる言葉はすべて外国の言葉だった」子どもはベトナム社会で，ベトナムの家族に囲まれてベトナム語を覚えて育っていくのだろう。

物語の中ではウリマルという言葉が繰り返される。慣用的な用法であっても韓国語をウリマル（私たちの言葉）と呼んでいる限り，そのウリの中には「他人との時間」に登場する妻のような移住者は含まれずいつまでもよそ者である。妻が韓国語を「あなたの国の言葉」と話すとき，一般的にウリ（私たち）と表現される韓国の社会に妻自身は含まれていない。それでも「僕」をはじめとする韓国人の側が不十分な韓国語を許容するのは，移住者がその社会の一員になれなくてもいいとする差別的な意識の表れだと考える。

そして，その社会の中で疎外されていく人たちの言葉を語ることが「多文化小説」の意義だと言えるだろう。

《注》

（1） チェ・ナムゴンが『2000年代韓国多文化小説研究――移住民の表象様相と文学的志向性を中心として』韓国外国語大学，博士学位論文，2014）で作成したリストには「多文化小説」として88作品があげられている。（최남건『2000년대 한국 다문화소설연구 – 이주민 재현 양상과 문학적 지향성을 중심으로』한국외국어대학교 박사학위논문，2014）

多文化小説を扱った主な研究書として이경재『다문화시대의 한국소설 읽기』소명출판，2015，（イ・キョンジェ『多文化時代の韓国小説を読む』ソミョン出版，2015），이미림『21세기 한국소설의 다문화와 이방인들』푸른사상，2015（イ・ミリム『21世紀韓国小説の多文化と異邦人たち』プルンササン，2015）などがある。

日本語で読める当該作品としては，『イスラーム精肉店』ソン・ホンギュ著，橋本

智保訳（新泉社，2022）「見送り」「えさ茶碗」「『労働新聞』」『二度の自画像』チョン・ソンテ著，吉良佳奈江訳（東京外国語大学出版会，2020），「みんな親切だ」「音楽の値段」『鳥は飛ぶのが楽しいか』チャン・ガンミョン著，吉良佳奈江訳（堀之内出版，2022）などがある。

（2） 金賢美（2014）はこの「多文化家族」という呼び方について「多文化家族への支援政策であるにもかかわらず，この政策の展開過程で多文化家族を韓国社会の脆弱階層と命名する文化的暴力が起こりうる」ことを指摘している。金賢美，羅一等訳「『社会的再生産』の危機と韓国家族の多層化」平田由紀江・小島優生『韓国家族――グローバル化と「伝統主義」のせめぎあいの中で』（亜紀書房，2014）

（3） 이순원「미안해요，호아저씨」『문학수첩』2003 년가을호（未邦訳，イ・スンウォン「ごめんなさい，ホーおじさん」『文学手帖』2003 年秋号）

（4） 백가흠「뿌이거나 쯔이거나」『현대문학』2010 년 8 월호（未邦訳，ペク・カフム「プイでもチュイでも」『現代文学』2010 年 8 月号，韓英バイリンガルエディションとして Chang Chung-hwa, Andrew James Keast 訳『Puy, Thuy, Whatever』2014，図書出版アジア）

（5） 서성란「파프리카」『한국문학』2007 년겨울호（未邦訳，ソ・ソンラン「パプリカ」『韓国文学』2007 年冬号）

（6） 中国の朝鮮族や朝鮮民主主義人民共和国から来た離脱民の場合，彼らの韓国語が不十分とまでは言えないが，例えば앉습니다（アンスムニダ）を앉습네다（アンスムネダ）とするなど一定の異質感が与えられる。

（7） イ・キョンジェ（2015）はキム・エランの「かの地に夜，ここに歌」に初めて移住者の言語を学ぶ韓国人が登場したことを指摘している。（김애란，「그곳에 밤，여기에 노래」2009，『文学와社会』，古川綾子訳『ひこうき雲』2021，亜紀書房に収録）

（8） 정인「타인과의 시간」『그 여자 사는 곳』문학수첩，2009（未邦訳，チョン・イン「他人との時間」『彼女の住むところ』文学手帖社，2009）

（9） イ・スンウォンの「ごめんなさい，ホーおじさん」では，主人公がベトナム人との結婚を進める横断幕に書かれた言葉に衝撃を受けるエピソードがある。実際に女性を商品化するこれらの広告は社会的な問題になり，禁止されている。

（10） 引用した試訳において，原文でウリマルとされている部分は「韓国語（ウリマル）と表記する」

（11） キム・ジェヨン「象」『創作と批評』2004 年冬号（김재영「코끼리」『창작과비평』2004 년겨울호）にもネパール人男性と朝鮮族の女性の間に生まれた少年から英語を学べることを期待して同級生の母親が家に招くエピソードがある。

（12） 多文化家庭子女の二重言語使用に関しては，すでに社会学，教育学などの視点から様々な研究がなされている。一例として，チャン・インシル，パク・ヨンジン「二重言語を駆使する多文化家庭子女の特性に関する研究」（キョンイン教育大学，2018）は，多文化家庭の子女の二重言語教育には母親の意思と努力による部分が大きいことを指摘している。장인실（경인교육대학교），박영진（경인교육대학교）「이중언어를 구사하는 다문화가정 자녀 특성에 관한 연구」（2018）

（13） イ・シベクの「畜生（セッキヤ）スーパー」（이시백「새끼야 슈퍼」単行本『누가 말을 죽였을까』삶이보이는창，2008）では，主人公の外国人労働者に対する視線が，畜生という言葉に表れる。主人公のピョンシクは，外国人労働者に対して「真っ黒な顔に，後頭部でも殴ればすぐさまこぼれおちそうなでかい目玉をきょろきょろさ

せる姿を見ると，同じ人間というよりも家で飼っている牛や豚なんかの家畜だと思うばかり」である。（시커먼 얼굴에 뒤통수라도치면 금세 솓아낼 것처럼 큼지막한 눈방울을 뒤룩거릴 때면 , 저게 같은 사람이라기 보다는 집에서 기르는 소나 돼지 같은 짐승이거니 여길 뿐이었다. 『누가 말을 죽였을까』，p. 188.

（韓国文学／市ヶ谷リベラルアーツセンター兼任講師）